

時	論
新	論
理	想
論	

米山俊直先生を偲んで

中牧 弘允

(なかまさ ひろちか)

本館民族文化研究部



さわやかにして軽やか

さる三月九日、米山俊直先生が逝かれた。風のように去っていかれた。さわやかに旅立たれたに違いない。わたしにはそのように感じられた。

米山先生の講義を聴いたことはない。講演もあまり記憶にない。しかし、学会や研究会での報告は何度もうかがっている。テンポがいつも軽やかだった。

米山先生の印象と残像はさわやかにして軽やかだ。権威主義的なところがなく、誰とでもわけ隔てなく接しておられた。知的好奇心のかたまりでありながら、ネチネチ、ドロドロ、ギスギスしたところがなく、いつもサラサラしていた。辛辣な批判は温顔にふさわしくなく、激情にはしつた姿もわたしには知らない。

米山先生は多くの顔をおもちであった。アメリカ文化人類学の紹介者、「小盆地宇宙論」に代表される日本の農村村研究、祇園祭・天神祭など都市祭礼の研究、「社縁」概念の提唱者、アフリカ研究のバイオニア、そして晩年は「京都学」の中核的

JAWS 第12回大会

■ 1999年3月10日-14日
会場 国立民族学博物館



社縁文化のセッションで「社縁」の説明をする米山先生。左端が筆者

推進者であった。

無言の檄をいただいて

個人的になつて恐縮だが、振り返ってみると、米山先生との接点は三つあった。まずは祭礼研究である。米山先生の祇園祭の研究は京都大学の教子たちとの共同作業の見事な結晶だった。わたしも東京大学で柳川啓一先生の宗教学ゼミで祭を追いかけていた。かたや京都の祇園祭で、こちらは会津田島の祇園祭や秩父の夜祭、さらには何の変哲もなさそうな北海道常呂町の祭だった。一方は「祇園祭・都市人類学」とはじめ「中央公論社」で刊行された、他方は「思想」の論文としてまとめられた。接点があったというより、一読者と

して米山先生から一方的に学恩を受けただけである。

ふたつ目は社縁研究である。わたしは会社やサラリーマンの研究に乗り出すきっかけとなったのは高野山の会社供養塔だったが、その存在を知ったのは米山先生がどこかの新聞に書かれた記事ではなかったかと思う。一九六〇年代の「社縁」概念は「タテ社会」に比肩しようが、「社縁との縁」という洒落な文章を「JAWS」(ジャパン・アンソロジー・ワークショップ)「民博大会」の刊行物(「日本の組織・社縁文化とインフォーマル活動」(東方出版)に寄せていただいたことは奇しきご縁だった。会社文化に関する民博の共同研究にも積極的に参加され、若輩たちに無言の檄を飛ばしていただいた。

三つ目はえびす研究である。大手前女子大学の学長になられたのを機に地元、西宮神社のえびす信仰について研究会を主宰され、わたしにも声をかけてくださった。米山先生の人脉と問題関心で集まった多彩な顔ぶれと多様なトピックがいつも新鮮で魅力的だった。わたし自身は社縁のカミとしてのえびすをエビスビールの祭祀に求め、恵比寿ガーテンプレイスのサッポロビール本社の一隅にある恵比寿神社を調査し、西宮神社との関係などについて報告した。

このえびす研究を含む近著を先生に贈呈したところ、二月一八日の消印で病床から絵葉書が届いた。そこには「十二月から緊急再入院。点滴を続けています」とあった。今はただ米山先生の学恩に感謝しつつ、颯爽と発たれた後ろ姿を思い浮かべながら、「冥福をお祈りするばかりである。」